

ホスピス病棟における観望会開催の試み

尾崎勝彦 福原直人 高橋 隼

[要約]ホスピス緩和病棟の多くはガーデンや池などの自然に触れることのできる設備が具備されており、患者さんやご家族の心の和みの一翼を担っている。草花等の身近な自然だけではなく、もっとも遠い自然である天体にもそのような役割を果たすであろうことが予測される。そこで天文のアウトリーチ活動としてホスピス病棟での観望会を試行錯誤的に行っている。本報告では、その実施状況および患者さんら参加者から得た感想や意見を紹介する。

1. 背景

自己の死への対処は人生最大、そして人類最大の問題の一つである。その問題から日夜逃れることなく取り組んでいるのが末期患者であろう。認知神経科学者のラマチャンドランは「人間は自分が死ぬ運命にあることをはっきりと自覚し、死を恐れている。しかし宇宙の研究は、時間を超越した感覚や、自分はより大きなものの一部であるという気持ちを与えてくれる。自分が進化する宇宙という永遠に展開するドラマの一部であると知れば、みずからの命に限りがあるという事実の恐ろしさが軽減される(Ramachandran et al.,2000)」と延べている。一方、筆者はかつて公開天文台で一般健常者を対象とした観望会参加者に質問紙調査を行い、観望会后に参加者の気分状態が改善されることを報告した(尾崎, 2006)。

そこで、筆者らはホスピス入院患者さん・ご家族に少しでも良い時間を過ごしてもらうことを目的として、天文台などの研究者やアマチュア天文家に呼びかけ、天文ボランティアを構成し、病棟での観望会を始めた。

2. 病棟における観望会

病棟での観望会は、公開天文台や街角で行われる観望会とは以下のような点で異なっている。参加者が原則として健康体でない、低 ADL(Activity of Daily Living;日常生活動作)であること、一般の観望会のように、「星を見たい」という強い動機付けをもって参加されるわけではないこと、多くの参加人

数が望めないこと、などである。 については、観望者の姿勢の制限が非常に大きいことが最大の問題である。 については、ボランティア側が「押しかけている」ことの謙虚さを持つことが要求される。 については、ボランティアの一つの役割は、病棟に「世間の風」を持ち込むことであるので、参加者が 0 人であっても粛々と遂行することが要求される。

また、より良いプログラムを目指すために、観望会やりっぱなしではなく、体力的に問題なく、また了承の得られた参加者に、後日必ず感想等を尋ねるようにしている。

3. 実施記録

表 1 に実施記録を示す。結果的に天候には非常に恵まれなかった。第 3 回目の「不戦敗」は、寒空のため当初から室内プログラムの計画であったことを示す。第 3 回目までは上記

で述べた様に「押しかけ」的位置づけであったが、第 4 回目以降は病棟の年中行事として位置づけられ、戸外(ガーデン)で寒くない 5 月、7 月、9 月に行うことになった。

4. 患者らの感想と方針の振れ

患者さんからは、「病棟でこのように星が見られるとは思っても見なかった」、「神秘的な雰囲気良かった」、「一般的な夏祭りのような行事よりも良かった」、などの概ね肯定的な感想もいただいる。中にはボランティアに感謝の手紙を書いて下さった方もおられた。その一方で、「説明が難しい、知識がないとわからない」、「疲れたが中座しにくかった」、「あ

まり興味はない」などの厳しい感想もいただいている。否定的な感想は特に第4回目に多く出された。この会の特徴は患者さんが少ない(2名)かわりにボランティアや病棟スタッフが多かったことである。そのため、患者さんを心理的に圧迫していたものと反省される。

そこで、第5回目以降は、積極的な説明をなるべくせずに星の姿や映像そのものを感覚的に楽しんでもらうこととし、いつからでも参加でき、いつでも退席できるような雰囲気を目指すと共に口頭でもその旨を伝えるように心がけた。また、曇天時は少人数のボランティアで活動することとした。幸い、第5回は天気にも恵まれ否定的な感想はいただかなかった。しかし、第6回の参加者からは、患者さん、ご家族、スタッフ共に「もう少し説明が欲しかった」という意見が寄せられた。但し、この会は全般的な印象として「よかった」という評価をいただいた。これは、曇天プログラムながら、戸外で行ったことが効いていると考えられる。第9回はもっとも天気に恵まれたのだが、残念ながら患者さんの参加は0であった。また第10回は、雨天開催で室内プログラムとなったが、参加の患者さんから「自分は宇宙の中の1つの生物である。気を大きく持たないといけない」という天文普及従事にとって本当に嬉しい感想をいただいた。

5. まとめと今後の課題等

ホスピス病棟で試行錯誤的に観望会を開催し、概ね肯定的な評価をいただいている。説明方針やプログラムなど今後も感想・意見をうかがいつつ臨機応変に対応していきたい。また、ベッドや車椅子の患者がうまく覗けないという重要課題があり、ファイバースコープやベッドのまま覗ける架台の作成など今後検討していきたい。

さらに、死と直面するデリケートな場所であり、そして天体は何万年、何億年という自己の死を前提とした時間的スケールの話を含む。このことが患者さんやご家族の死に対する不安を喚起しないともかぎらない。そのような場合にも患者さんらとコミュニケーションが継続するように、天文ボランティア自身の死生観をある程度は醸成しておく必要があるだろう。

なお、本稿は日本科学教育学会第34回広島大会にて発表した原稿に新たなデータを加えて加筆・修正したものである。

[文献]

尾崎勝彦：天体観望会による情動変化，天文教育 18(2)，2-11，2006

Ramachandran V.S. & Blakeslee S. 2000
Phantoms In The Brain 山下篤子 訳、
「脳の中の幽霊」

表1 実施記録

	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回
実施日	07年9月24日(月・祝)	08年8月16日(土)	08年11月29日(土)	09年7月29日(水)	09年10月3日(土)
天候	曇り 雨	曇り、瞬間晴れ間	不戦敗	曇天	晴天
ボランティア	6名+2名(非天文)	6名	5名	6名	2名+1名(非天文)
患者さん参加者	3名:車椅子2名 / 自力歩行1名	6名:ベッド3名 / 車椅子2名 / 自力歩行1名	3名:ベッド2名 / 車椅子1名	2名:車椅子1名 / 自力歩行1名	3名:ベッド2名 / 車椅子1名
その他参加者	ご家族3名 病棟スタッフ5.6名	病棟スタッフ3名	ご家族3名 病棟スタッフ2名	病棟スタッフ5.6名	ご家族9名 病棟スタッフ2名
メニュー	<室内> NASA Picture of the day 本日の星空(ホームスター)	<室内> NASA Astronomy Picture of the Day 本日の星空(Mitaka) <ガーデン> 木星・月	<室内> NASA Astronomy Picture of the Day 本日の星空(ステラナビ) 絵本朗読	<室内> NASA Astronomy Picture of the Day 本日の星空(Mitaka)	<ガーデン> かぐやハイビジョン映像 木星・月
	第6回	第7回	第8回	第9回	第10回
実施日	10年5月31日(月)	10年7月27日(火)	10年10月7日(木)	11年6月28日(火)	11年10月14日(金)
天候	曇天	晴天	晴天やや曇天	超晴天	不戦敗完全雨天
ボランティア	4名	4名	3名	4名	4名
患者さん参加者	2名:ベッド1名 / 自力歩行1名	3名:ベッド2名 / 車椅子1名	1名(車椅子)	0名	2名:自力歩行1名 / 車椅子1名
その他参加者	ご家族2名 病棟スタッフ3名	病院スタッフ3名	家族4名 病棟スタッフ5名	家族3名	家族3名 病棟スタッフ2名
メニュー	<ガーデン> 南アフリカ写真 Mitaka(本日の星空+離陸モード) Powers of ten	<ガーデン> 夏の大三角 / 月 / (土星)	<ガーデン> 木星(CCD撮影) / アルビレオ / 天王星	<ガーデン> 土星 / 春の大曲線 / 夏の大三角 (画像) ホームスターエキストラバージョン	<室内> 宇宙映像紹介 本日の星空